

# 方言研究の学問

——「もの」の学問——

藤 原 与 一

私は、方言学を「もの」の学問」の方向にねりあげていきたいと考えるものであります。

## 一

「もの」の学問」という概念は、「方法の学問」という概念になにほどか対立し、「かたちの学問」という概念にどのようにか対立するでしょう。

今日まで、私自身、方言研究の道をあゆんできて、みずからの所業をかえりみながら言明しうことは、方言研究に、「もの」の学問」を志向してきたことです。この道を最初に示唆してくださったのは、山本忠雄先生であることを、ここに私は感謝をもってしるさなくてはなりません。

英語学者、山本忠雄先生は、早期には文体論者でした。察しますのに、先生は、日本人として外国語を専攻する身のもてあつかいかたをみずから問題とするうちに、しぜんに、当時の新来の学問、文体論に身をゆだねられたようであります。その道

の業績を大いにあげられたのにもかかわらず、先生はみずから文体論を去っていかれます。そのころの先生は、もはや「もの」の学問」の強調者でした。察しますのに、英語を研究しても、日本人としての英語研究が、かたちの学問に浮上するのを、いかんともすることができなかったのではないでしょう。か。先生は、英語学とは英語をよく読むことだなどと言われつつ、もの」の学問を求められました。

この先生が毎度私に言われたことは、藤原はものををつかんでいる、ということでした。方言の山野に出かけて調査してくる私のしごとを、わらじばきの学問と評され、私のしごとを、ものに対面するしごとだとせられたのであります。

一度は、こういうことがありました。英語英文学の先生たちの集会で、私に方言調査の話しをさせられたのであります。当惑する私に、先生がくりかえし言われたことは、ただありのままに話をすればいいのだということでした。つまり先生は、私の調査の実経験を丸まま吐露させようと考えられたようです。それにもかかわらず、なんとかして、整った一場のお話し

をしたいと努力した私は、まったくわが身知らずと言うべきものでした。

藤原をとらえて、ものを言わしめるのをたのしまれた先生は、いつも、私自身なんともないように思われる平凡なことに、眼を輝かされたのでした。ついには、鈍物の私も、しだいにも、の学問に眼を開くようになりました。

こういうことがありました。先生が私の宅に見えて、例のように討論（私にとっては受教）がはじまりました。——ソシユールの共時態、通時態の論をふまえて、私が、手前流に、高次共時を云々していた時のことでした。先生が、これはユリの花である、というセンチメンスがあったとする。と説かれました。（おりしも卓上には、ユリの花がいけられていたのです。）それを聞いたとたんに私は、そんな日本語はありません。と言いました。これがつよく先生にはね返っていったようです。先生は全面的にそれを肯定されました。私はそのさい、おおいにも、の学問にめざめたように思います。そんな日本語はありません。と言って、私が自己の胸中にいだきかかげた日本語こそは、日本語という生きたものにはかならなかつたでしょう。ようやくにして私は、実体を感じとらえることができましたようです。

山本先生のお話しを承ることは、幾十回にわたっているでしょう。そのすべてを一貫している先生の思想は、「もの」の学問」の思想です。

現在、方言学に心をもやす私にも、もの、の学問への思慕のつよいことが明らかであります。

## 二

もの、の学問とは、もの、そのものを重んじる学問、実質・実体を重んじる学問の意であります。実体をぐんぐんと前面におし出していくこうとする学問、いな、実体がぐんぐんと前に出てくるようにする学問であります。——かたちをさきに与えることをひかえつつ、したがって、いろいろな枠ぐみなどを設定することはしないで、むしろ事実認識に徹底しようとするものであります。

豊富な資料というものがここに要請されています。豊富な資料は、しばしば豊富な用例であってもよいことです。生きた用例の世界に、徹底的な追求心向けるとなつては、当然、そのような用例の生きた言語表現の世界が重視されなくてはなりません。実体尊重論は、おのずから表現論的なものだ、私は心得ています。

少数例は価値の低い対象となるでしょうか。いちがいにそうだとは言えません。少数例が、ないしは孤立例が、多量の調査作業から抽出されたとするならば、その多量の調査作業がすでに資料の豊富に該当します。要は事実認識のための調査探求（いわば用例追求）そのことが重要なしだいです。もの、の学問は、そうしたところにあるのだと考えられます。

## 三

『言語』1978 Vol.7 No6 に、柴谷方良氏の「カリフォルニア大学ハバークレー校」——という題の文章が見えます。「連載・アメリカ

カ主要大学言語学科紹介②」です。これに、次下の記述が見られるのを、私は好んでとりあげていきたいと思います。同誌 68 ページには、

現在されなければならないことは、音韻論の形式化よりも、音韻現象の実質的な知識の集積である、と新しく脚注をつけ加えている。時として言語事実からかけ離れたレベルまでの形式化に走る生成音韻論に疑問を持つのはワンドだけではない。

とあります。ついで、69 ページから 70 ページにわたっての、つぎの記述を引用することができます。

理論的な立場でことごとく対立している G・レイコフとチョムスキーであるが、奇妙なことにこの二人の理論家には共通点がある。それは二人ともあまり言葉を知らない関係上、理論の裏づけとなる言語事実に対する知識が非常に劣るという点である。この点において、アメリカ構造主義者と呼ばれるホケット、パイク、それにグリーンバークといった言語学者と非常に対照的である。現在の G・レイコフの低迷、それにチョムスキーの言語の普遍性に関する早合点等は、貧弱な言語事実の知識に基づいた理論の追求の結果と考えられる。このことを人一倍痛感しているのは G・レイコフ自身であろう。彼は、前にふれたパレットとのインタビューにおいて、過去二十年間みられた理論偏重は不幸なことであると、形式化にとらわれない言語記述の重要性を説き、先にあげた学者や、ヤコブソンの業績を称えている。最近あちらこちらで感じられる、地道な言語記述、または言語事実の集積への動きは、右の考えは G・レイコフのみのものではないということをいみじくも反映している。

ここには「形式化にとらわれない言語記述の重要性」などということばがあります。なお、「地道な言語記述、または言語事実の集積」とのことばも見ることができます。さきには、「実質的な知識の集積」ということばがありました。論者の述べようとせられる趣意はよくわかるような気がします。ただここで私は、なおつけ加えて述べたいと思います。「実質的な知識の集積」あるいは「言語事実の集積」の「集積」というのは不十分でしょう。「集積」の語は、他方に、この作業とははなれた「理論の追求」を予想させるかもしれません。「理論の追求」からはなれた「実質的な知識の集積」は、低次の集積作業であって、これに、実質的な知識を言うのには、いささか無理があるとされるように思います。

柴谷氏の紹介は、雄勁であり、私どもを刺激してやまないものを多く見せていられます。右の引用によっても、私は、言語研究上の、ものの学問への欲求が、アメリカ言語学界にもあることを、明らかにすることができたかと思えます。

私が、方言研究上、念としてきたもの、また今後も念としてつづきたいもの・ことは、まさに「地道な言語研究」であり、「論の形式化」を避けようとすることであります。

#### 四

一実験心理学者の、最終講義、から得たことばを、つぎにあげてみます。

「理論がたくさんあるのは、事実がわかっていないことだ。」

「事実がわかったら理論ではなくなる。」

「あまりに理論にふりまわされず、事実を確認していけ。それが実証科学だ。」

私は、自分の道を、今から開いていく。

右に見られる「理論」と「事実」との用語を云々することは、今、しません。しかし、この引用全体から、私どもは、かたちの学問ともの学問という思惟をみちびき出すことは容易でありましよう。

私は、一方言研究者として、おのれの道をあゆみつつ、「理論がたくさんあるのは」というような状況を歓迎することはできません。事実からはなれて、どこに有力な理論が存立しているのでありましようか。「事実がわかったら理論ではなくなる」ような理論がいくらか与えられたとしても、それらはけっして力づよいものではないでしょう。

「事実」の確認につとめるかぎりには、「あまりに理論にふりまわされ」ることなどは、あり得ないのではないでしようか。——これがもの学問のたちばにはかなりません。いったい、人は、理論を認めることが軽率でありすぎはしないでしょうか。

## 五

方言研究に関する発表会の席で、私どもは、しばしばつぎのような経験をします。

たとえば、一研究者がその郷里方言について、センテンス抑揚の状況を精細にしらべあげ、かくして当該方言の文アクセント傾向を

叙述したとすると、多くの聞き手は、たいがい、その精密明確な整頓と叙述とに敬服の念をもよおします。

また、人が、その郷里方言の、しかも家族社会での音声現象に関して、いかにも精確な発表をすると、多くの聴者は、その内実に敦い信頼感をおぼえ、その発表をすぐれたものとしめます。

これらの実例とは反対のものが、研究者の短期間多地点を調査して得た結果の発表であります。

郷里方言が問題とされたばあいの研究作品の魅力は、ほとんどすべて、その研究者が方言研究のものの学問に成功しているところから出ていましよう。自己の熟知の郷里方言が問題とされたばあいは、むしろ必然的に、人は、私の言うものの学問におもむいています。

調査法に、いわゆる質問調査があります。所定の項目によっての、当方のかつてにしたがった、一連の質問調査がなされた時、相手がたに味けなさとか不満足感・不安感が残り、これで私は調査されたことになるのか、といったような気もちが残るのは、すなわち、ものの学問ではない、かたちの学問がとりおこなわれたからであります。

## 六

私に「文末訴えア音」の考えがあります。

もしア。

などと、宮城県下その他で、よびかけのことばづかいがなされていますが、この例だと、「もし。」と相手がたに訴えるのに、人は、

「もし」の「し」どめで満足しないで、「し」の下にア音をそえています。これをそえますと、「もし」の「し」の「i」母音のすばもりは、やがて「a」音におし開かれて、相手がたへの「もし」の訴えの聞こえは、大きくなります。「a」は「文末訴えア音」です。方言界の人たちは、おそらく、だれするともなくしげんに、天与の自発的な言語活動によって、この種の「文末訴えア音」のいとなみを創作したのでありましょう。日本語の方言界での、文表現を相手に訴えかけていく方法の、妙味ある手だてが、ここに看取されます。

東北方言あるいはその関連方言に関して、あるいは出雲方言に関して、私はとくにこの種の「文末訴えア音」の事実を重視しています。これらの地方での方言生活の実質に眼をそげばそげほど、隠微なこの「文末訴えア音」を、私は、表現生活上の重要素としてとりたてないではいられないのであります。

もし、音素論者が、音素論のたてまえで、上の「文末訴えア音」をとりあげたとしたら、その人は「a」音をどのように待遇するのでしょうか。「文末訴えア音」は、音素論者の記述の中にどのような位置を与えられるであろうかと、私は考えてみるのであります。

もし、「文末訴えア音」が、音素論者の特別の待遇を得ることがないようでしたら、私は、方言研究のために、その処置を遺憾とします。そうして、遺憾とすべき音素論を、方言研究に関する、かたちの学問だと考えます。方言研究上、「文末訴えア音」の究明が必要であるとするならば、その必要が明視されるような学問形態がとられなくてはなりません。当然のことでありましょう。そうした処

置を、私は当然のように、ものの学問とよびます。

## 七

方言を資料とする言語の学問が、言語科学になったとしても、そこに、方言研究の方言研究らしさが失われていたら、これは、言語科学ではあっても、ものの学問としての方言学ではありません。一般的に言って、私も、広い言語科学の中に立ちつつも、方言研究のためには、ものの学問を目ざすべきだと考えられます。方言学のつよい存在理由が、そこにあるのではないのでしょうか。

くりかえし強調すべきは、方言学は現象追求の学であるということとです。自然言語というが中にも、もっとも明白な自然言語——方言を、現象態としてとらえるしごとは、本来的にも、ものの学問の性格を持っています。私には、方言研究に関するいわゆる生成文法論のはたらきは、第一義的に有用だとは思われません。ただ、普遍化の方法あるいは思惟の見せてくれる方法論特性の、ものの学問を刺激する効能の大は、おおいに認めなくてはならないところであります。

## 八

当今、小方言の討究を特設して、早くも一個の研究発表におよぶこと、あるいは一個の研究論文を成すことが、すくなくありません。もとより、学の大きな進展のためには、いろいろの研究展開がはかられてよいわけでありませうけれども、その特設の発表あるいは

論文が、小成の美型式にとらわれるならば、私はそれをかたちの学問の、あまりよくないばあいと批判しないではいられません。一般言語学的な知見を横しつつ、小成の研究発表を美型式にのせようとするなどとは、その人の研究の大成のためには、むしろ惜しむべきことであります。この道の研究者にまず望まれるのは、ものの世界への突進の精神であります。「科学的」ということは妄信はすでにさらなくてはなりません。自然科学的な方法に追隨するのに近い分析の見られるばあいをのみ「科学的」と言うなども、意味のうすいことであります。方言研究のためには、ものの学問の練成に「科学的」を考え、この練成のかなたに科学としての方言学を認めるべきであります。

## 九

一九七八年の初頭、私はつぎのような自問自答をしました。

おまえの「学」とするものは何なのだ？——どんな「学」なのだ？これが自問であります。答えることにつとめて、私は以下の数カ条の答えをつくりました。

一 私の「学」は言語の学だ。

二 人間の言語の学だ。

生活・生命の学だ。

したがって総合的把握を重視する。

分析も、しかるべく重視する。

三 私は、科学主義の傾向を避けて科学を求める。

科学精神を尊重する。

——実証精神を尊重する。

四 方法の学よりも実の学を求める。

五 要するに、ものの学問をねらう。

実学。事実の学。

理論的追求に励むとしても、私の理論言語学は実践の学であります。

近來、諸雑誌上に見うる言語学の実際は、テキストの学とよびうるばあいが多くではないでしょうか。前行者の述作を下敷きとする諸研究を、私は「テキストの学」とよんでみます。これに対して私自身が重んじようとするのは、日本語の事実・事態と言うべき方言そのものを、自身で直接にとる学であります。これが、「実体の学」とよばれることを、私は念願します。

日本語についての生成文法論の行きかたなどは、現に日本語についてその方法を実践しているという点で、人はこれを事実の学、あるいは実体の学ともよぼうとするかもしれませんけれども、私はそれを、「モデルからの学」とよびたいのです。私は、西欧の言語理論、あるいは既成の理論（たとえば方言周圈論、ないしはそれ流の枠組みによって、実体追求をしようとはしていません。（たとえば方言周圈論の適用といったような、ものの考えかたはしたことがありません。実体そのものの中にモデルを求めます。この点では、「モデルからの学」ではなくて、「モデルへの学」であります。

与えられるモデルを尊重しつつも、つねに、それへのアンティテーゼに生きようとしてきました。そして統合の見地によじのぼることを念としてきたのであります。私にとっては、それがものの学問の論理でした。

近來の、言語の学では（いわゆる言語学、いわゆる国語学では）すでに「モデル」の語も術語として熟しているようであります。「情報」の語もまたしかりであります。しかし、考えとりますのに、モデルの語を用いての論作そのものに、術語「モデル」はかならずしも安定的ではありません。「情報」の一語にいたっては、その使用過多も見られます。——そこにはかたちの学問が明らかでもありません。私は、「情報」類に無条件に自己の触覚をたてむけ、諸論文中の「モデル」の語に眼を見ひらきつつ、かつはみだりに「情報」「モデル」とは言わないことにつとめています。「他語の学」よりも「自語の学」を念ずるものであります。他語に依拠する思弁の学にあそぶことをひかえつつ、自語を求めて実証の学に生きようとするのであります。

実体追求をつぎのようにも説明することができます。一つに、方言の世界に、日本語の事実を多く深く見とっていくのであります。二つに、説明のための思考の努力にも増して、説明のための材料を多くすることの努力にしががいます。三つに、説明者が顔を出さないような事実論を旨とします。これらのことは、「事実・事態に密着すること。ひとえにそこに自己を生かすこと。」と言いあらためることもできますよう。

## 十

私はかつて、つぎのように言われたことがあります。言語理論のほうをやっている人には、藤原の研究が入用である。と。これは、私にとっては、ありがたい評言であります。藤原の心がける

もの、学問は、上の評者に了解されているとしなくてはなりません。方言という自然言語の具体的究明こそは、純粹実証学とも言うことができませんか。私は、対象の具体を凝視します。そうして、凝視のさきにあるものを徹底的にとりあげようとしています。（ことばはいりませんが「具体的究明」であります。）もとよりのこと、凝視と徹底的なとりあげとは、私に、あくなき思惟と考察とを要求するものであり、それは当然、人に理論と言われる産物になります。

## 十一

私に、方言学への努力があるとして、自身、その努力を解剖しますなら、その中心部には、人と環境とをたいせつにしようとする方言観があります。すなわち生活語観です（言語行動観、でもありましょう）。人と環境とをたいせつにする方言の学問は、ものの学問として、本来的に、方言社会学になっていくべきものではないでしょうか。socio-linguistics という術語が設定されながらも、——それが方言を対象にとったばあい、なおもそのものの学問としての成熟がよわいの、なんとしたことばの矛盾でしょうか。

こと、分析に関しては、私は、微視分析と巨視分析とを問わず、そこに、優良な言語心理学的見地が生かされるべきものと考えます。この時、私は、世の方言研究に、繊細な言語心理学的心情の、かならずしも生きていないのをもどかしく思います。

文化人類学の名がありますが、私は、与えられたかたちとしての文化人類学になじむことはできません。そうして、いま述べた私流の方言社会学や、私流の言語心理学、こういうものの内面的な統合

のうえに、私は、私流の文化人類学を生みだしていると考えてるものであります。

## 十二

地方方言社会の現実の中にどっぷりとつかって、地方生活語をまゐるまる体験し、あの、共通語観念も標準語観念もない人たちの集団の、毎日の方言生活を見（――その人たちの生活語の実情を見）、その中でいとなむいっさいの方言研究、ならびに、それらにもとづく諸研究を、私は、ものの学問と考えています。

方言の中に出かけていっても、調査者あるいは研究者が、共通語のあたまで方言生活をつまみ食いするのでは、分析もまったく恣意的な分析であって、要するに理想的な方言研究ではありません。当方設定の項目に対応する事実をのみ、質問によってとりあげるしごとに終始するかぎりには、方言研究もかたちの学問であります。

この意味で、自然調査は絶対に必要であります。私はかつて、自分の郷里で、方言調査者の相手となつたことがあります。質問だけされて帰られてしまったことが、くりかえし思いかえされます。

私の経験につきのようなこともあります。方言研究者たちと対談していて、相手の人々が、生活語という「方言の体系的存在」を体験していないのにおどろかされました。方言を論題にすると、私はすぐに、方言の統一体とその生活とへの実感を、対話の出发点にしがちなのですが、人はかならずしもそうではありません。率直に言つて、人は、方言把握とは言いがらも、上に言う実感をぬきにした、方言事実の恣意的な捕捉にしたがっていることが多いように

す。あのように、地方の方言生活状態がわかっていなくて、なんの方言研究だらうかと、思わせられたりもすることがあります。ともあれ、私は、日ごろつねに、方言生活の純粋さがよくわかる人間になりたいと思っています。

## 十三

言語の学の理想形態、これを求めない言語学徒はいないでしょう。私自身もまた、一学徒として、つねに言語の学の理想形態を求めます。

私は、言語の学を人間学的に深化せしめることによって、言語の学の理想形態を将来したいと考えてるものであります。言うところの人間学的深化は、ものの学問の志向によってもたらされると考えます。

朝日新聞、昭和五十三年七月二十二日（土）の記事に、「モンゴル語・日本語 詳細に対比し論考」という見だしの記事があります。ここに、小沢重男氏の『モンゴル語と日本語』（弘文堂）がとりあげられています。そして、著者のことは、「日本語と、似ている」と感じられる諸言語と日本語とをできるだけ詳細に比べて見るといふ作業が、日本語の系統を解明するため必須の作業の一つとして要請される」というのが引用されています。小沢氏は、「日本語の系統は、現在のところ不明……」というたちばのよしです。「現在のところ不明」との理解をとられる氏は、「日本語と、似ている」と感じられる諸言語と日本語とをできるだけ詳細に比べて見るといふ作業」を、「日本語



の系統を解明するため必須の作業の一つとして」いられます。私はここに、日本語系統論の諸説のさかんな中であつての、小沢氏のものの学問があると考えます。

アメリカの構造主義の言語学やチョムスキーアンの言語学あるいは生成文法論方向の言語学は、はたしてどのように人間学的たり得ているでありましょうか。私どもの目にうつるかぎりのところでは、それらは、人間学的であるよりも、しばしば言語技術論的であります。

ひるがえつて、わが国のたとえば国語史研究の類を見ても、これは、はたしてどの程度に人間学的たり得ているでありましょうか。

一般的に言つて、国語研究が、どんなに精細におこなわれたとしても、明らかにされた事実が、絶対値という点で、小であるならば、私は、それを価値ある研究とはすることができません。研究を精細におこない得て、かつ国語の大きな事実を明らかにし得たばあいは、言うところの絶対値が大であつて、これは当然、価値の高い研究であります。ものの学問の優位がここに明らかであろうと思ひます。

#### 十四

いわゆる国語学に関しては、私は、私自身の当然の道ゆきとして、「現代語」学を考える者であります。国語学に邁進して、浅い言語学ではない、深い言語学を庶幾する時、私としては、「現代語」学におもむかざるを得ないのであります。言いかえれば、私は、自己の国語学が浅い言語学になることを恐れて、ひたすらに、

「国語現実としての方言」の学におもむくのであります。ここに来れば、しごとをしつつ、私自身、人間の心の中に深くはいりこんでいくことができます。深い言語学への道が、ここで感得されます。

「現代語」学、これは、私にとつてのものの学問であります。

今日も、また以前も、哲学者や芸術家の、言語を考え日本語を語ることが、すくなくありません。それらに接するたびに思うことですが、それらの所論は、鋭く論じられているようでも、多くは、一般化された言語・日本語についての論です。私は、深い言語学を思念して、徹底的に、個別の言語状態にたちむかっています。

「個別の」あるいは「対人の」という心がけ、これこそは、人間につき入つてその心の世界にあそび、そこで言語をとらえる要諦であろうと考えています。

個への徹底は、けつして個にはおわりません。個への徹底は、私どもをして、真の具体の把握を可能ならしめます。

「個別」、「具体」、「実質」、そこに歴史の実体があります。歴史の実体の学が、深い学だと考えます。——その学は、ものの学にはなりません。

#### 十五

ものの学問は、生活（生活実体）の学問、人間の学問です。

方言研究のために、私は、ものの学問、生活語の学問を考えます。

(初稿 五十三・七・二十四)  
(再稿 五十四・十一・二十五)